2023 年 ヨーロッパ病理学会 (ECP2023) 参加報告

東京女子医科大学医学部
病理学講座 (人体病理学・病態神経科学分野)
増井 憲太

このたび日本病理学会 (JSP) とヨーロッパ病理学会 (ESP) の交流事業の一環として、アイルランドのダブリンで開催された 2023 年ヨーロッパ病理学会 (35th European Congress of Pathology: ECP2023) に参加致しました。今回の派遣に際しては、国際交流委員会委員長の都築豊徳先生をはじめ、多くのご支援を賜りました事務局ご担当の皆様に、この場を借りてお礼申し上げます。

慶應大学病理診断部の眞杉洋平先生と共に、私達が参加したセッションは、両学会の病理研究者 2 名ずつ (ESP サイドは Dr. Irene Gullo と Dr. Balazs Acs) による合同セッションでした (Joint Special Session ESP & JSP: From research to pathological practice: examples of translational paths)。僭越ながら、Dr. Gullo と私で co-chair を務め、JSP と ESP サイドから交互に発表を行いました。その内容は脳腫瘍の分子病理から AI・デジタルパソロジー、更には膵癌や胃癌の組織内不均一性など多岐に渡るものでしたが、病理学の基礎研究を臨床に届けたいと言う思いのこもった、病理医ならでは translational な姿勢が反映された素晴らしいセッションでした。講演後は roundtable 形式の Q & A タイムが設けられましたが、質問の多くがデジタルパソロジーや分子診断に関するもので、自身の今後の研究の方向性を熟慮する良い機会ともなりました。

本学会は、対面とウェブを含めて 166 セッションに渡り、94 ヶ国から 4400 人以上が参加し、規模で言うと USCAP を超えるものでした。大変貴重な機会を頂いた事に感謝すると共に、病理学を発展させたいという ESP の心意気を感じました。また、現地で海外の病理医や研究者とディスカッションをする事で、特に海外で進むデジタルパソロジーの実装など、日本と海外における医療制度や文化の違いを知り、医療や病理学の枠組みを改めて見つめ直す事が出来ました。

筆者の講演風景

帰国に際しては、気候の違いや過密なスケジュールにより少々体調を崩してしまいましたが、そういった部分も含めて留学や海外出張の"ワクワク感"を思い出す事が出来ました。最後になりましたが、貴重な機会を与えて頂きました JSP および ESP 関係者の皆様に深く感謝申し上げます。